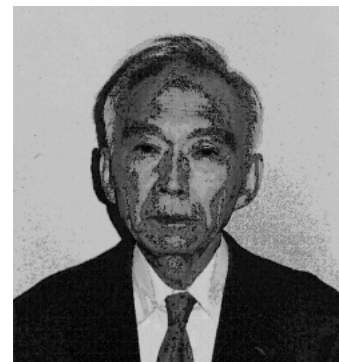


卷 頭 言

「変化する日本社会における加速器開発」

小寺 正俊
Masatoshi ODERA



既に何人もの方々が巻頭言で指摘されたように、敗戦前後の日本社会の混乱と技術の実状を多少なりとも見聞した者にとって、現在の日本の加速器とその関連技術の進歩は、素晴らしいの一語に尽きる。この状態の達成は、勿論それぞれの加速器計画を立案したリーダーや、技術開発を担当した多くの関係者の努力の積み重ねがあって、始めて可能となったことは言うまでもない。更に、ほぼ同一の時期に、日本の企業技術の目覚ましい向上が続き、加速器技術の全てではないにしても、技術基盤の一部を企業が確実に供給し得るに到ったことが、日本の加速器の評価の確立に重要な因子であったと考えられる。

個人的体験としては、幾つかの「技術打合わせ」の場に出席して、メーカーの技術者が問題をよく理解し、設計側の要求に応じて、信頼性を考慮した製作技術の提案と、その実施に真摯に取り組む姿勢に感銘した覚えがある。しかし今、日本の社会は少子高齢化の波にさらされて、若い研究者と技術者の数が減少しつつある。またアジア諸国の経済と技術の成長により、工場の海外移転や、デバイスの一部の海外委託など、企業活動がアジア諸国の技術を意識せざるを得なくなって居る。このように、加速器技術の一端を支えてきた企業の技術環境が大きく変わりつつある中で、これ迄のような加速器開発方式が継続し得るかの点検が必要であるかもしれない。

また、大学、研究所の独立行政法人化が、長期的にどのような影響を日本の研究用加速器の開発現場に及ぼすかは、未だ明瞭ではなく、その重要さを思うと、更に長期の調査と意見交換が必要で、その結果によっては、対策の立案が学会の重要な任務となるかもしれない。なるべくは、新制度が問題を生じないことを望むものではあるが。

加速器技術進歩の受益者である、医療、滅菌、イオンインプランテーションその他の実用加速器は、それぞれに必要とされる機能が現在は明らかであり、関係企業による自立的開発が可能で、日本社会の変化に対する対応は比較的容易であるが、そのような実用機ではなく、本質的に前人の成果を超えることが要求される研究用加速器は、企画時点の社会の状況に影響されざるを得ないであろう。物理屋に加えて、広い技術社会の知能の動員も要するので、計画リーダーには、社会の動きを判断し得る広い視野の人が、従来にまして必要とされるのではないか。

加速器学会が、今後も多くの方々の協力の核となり、技術環境の変化を克服し、優れた性能と高い信頼性を持つ日本の加速器の伝統を引き継がれることを、期待したい。